

はじめに

これは、米欧回覧の会・歴史部会で、2012年2月20日に行った『大隈重信と佐賀藩』の講演をもとに書き改めたものです。

大隈重信は、ご存知の通り明治4年から6年にかけて、岩倉使節団が一年9ヶ月余（632日）の米欧回覧中の留守政府の実務部隊の中心にあつて、廃藩置県後の、まだ不安定な維新政府を、まさに《鬼のいぬ間の洗濯》とばかりに縦横無尽に操縦して、その手腕を発揮した。それはあたかも大隅内閣と称されるほど多岐にわたる諸政策を他の参議や官僚と連携して実行した。主なものでは、工務省・内務省の創設、博覧会総裁として、ウィーンに副総裁の佐野常民を送り、新島襄を取り立てて郵便制度を創設、鉄道施設の推進、大木大蔵卿と学制（義務教育）の実施、山県有朋と徴兵制の実施、太陽暦の実施、租税の為の地租改正など枚挙に暇がないほど新政府の基礎固めに尽力した。とりわけの貢献は、明治14年の政変で下野するまで、大蔵卿として、実質的に明治新政府の財政を担った大隅財政であろう。近代国家財政の基本が、ここに定まったと言える。

この様に明治国家の基礎作りに関与した大隅は、どこで、どんな風に教育されて来たのか、どのような経緯で新政府に採用されたのかに興味が出る。大隈重信は、佐賀藩士出身である。その佐賀藩（肥前）は、徳川慶喜が大政奉還し、王政復古が実現した時点では、まだ倒幕に関与していない。維新政府は“薩長土肥”により実現したとよくいわれるが、肥前が新政府に登場するのは、江戸開城のために徳川慶喜の大政奉還の後、東征軍が江戸に向かう前後からである。その佐賀藩が、岩倉使節団が帰国した時点の留守政府の中で、四人の参議（大蔵卿—大隈重信、外務卿—副島種臣、司法卿—江藤新平、文部卿—大木高喬）を占め、あたかも佐賀藩政府の態を成していたほどに、人材を供給できたのはなぜか。さらに明治6年の政変も、征韓論が発端ではあるが、回覧中に、政府内勢力が、土肥に席卷されていることへの、薩長の僻みがあったのも事実であろう。

佐賀藩は幕末までに日本一の海軍力と技術力を備えた藩である。それを主導したのが藩主の鍋島閑叟である。大隅の親友である米欧回覧実記の著者・久米邦武が、欧米の政治・文化・経済・産業や風俗を見事なリアリズムの目で記述しえたのはなぜか。久米は、この藩主・閑叟の侍従として、ものを見る目を養われたひとりであった。

このように『大隈重信と佐賀藩』の論考を進めると、幕末の倒幕をリードして維新政府を実現した志士たちは、佐賀藩に限らず、みんな江戸の教育を受けてきた人びとだという、当たり前のことに思い当たる。久米が、岩倉が、大久保が、木戸が、そして伊藤が米欧回覧によって、欧米の文化の実態を、正確に把握して、その後の日本の“国のかたち”造りに生かしたのは、大局観で世界を見る目を、江戸の教育によって養われていたのである。そして、欧米を見た目は、欧米と日本との差は、蒸気機関の発展による産業革命以降の、

僅か40年の差に過ぎないとの認識に至る。日本の近代は、決して、明治維新の西洋文化の摂取から始まったのではなく、江戸時代中期の、決して欧米に引けをとらない時期から、近代を先取りしていたことに気付く。

それは、幕末の1865年に、世界漫遊旅行の途次、日本に立ち寄ったシュリーマンがその旅行記の中に記録された、次のような日本論に看取されている。

「この国は平和で、総じて満足しており、豊かさにあふれ、極めて堅固な社会秩序があり、世界のいかなる国々よりも進んだ文明国である。」「もし人が言うように文明を物質文明として理解するなら、日本人は非常に文明化された民族だといえよう。なぜなら産業技術において、彼らは蒸気機関の助けもなく達せられるかぎりの非常に高度な完成度を示しているからである。」

以下、大隅重信と佐賀藩が明治政府へ登場してきた経緯と、佐賀藩の革新性の背景を、江戸時代の文明力・教育力などを交えて考えてみたい。

大隅重信の生い立ちと人柄

大隅重信は1838年（天保9年）、佐賀城下会所小路に、父信保、母三井子の長男として生まれる。幼名・八太郎は龍造寺八幡宮に因む。戦国時代に九州地方で勢力のあった龍造寺隆信は、薩摩の島津家久に破れて没落し、その家臣であった鍋島が再興させた。その鍋島家に仕えて、祖父の代より、知行400石の砲術家（石火矢頭）を勤めてきた。後に大隅は政府高官となると、菅原道真を始祖とする源氏名を名乗っている。13歳で父に死別し、母三井子の庇護の元で育つ。三井子は賢母で、下男・下女の助けをうけて、木綿を紡ぎ、織って、家族の服を縫い、味噌、醤油、どぶろく、百本漬、酢まで自家製し、300坪の畑で、ナス、きゅうり、芋、大根、菜類を栽培した。大隅の友達が遊びに来ると、手料理や団子、牡丹餅を作ってもてなし、倶楽部のように人が集まった。（後の築地梁山泊を髣髴させる）又度量の広い寛大な人で、人の過ちを責めず、人の罪を咎めず、勤王の為なら、家財も売り、借財も厭わないほどの子思いの楽道家でもあった。

大隅の生涯を通しての楽天性と他人を怒ったことがない性格は、この母の影響だろう。

幼い頃は、おとなしい子であったようだが、7歳で藩校の弘道館に漢学を学び、16歳には体格も向上し、ガキ大将的な子供に育つ。（新政府出仕の頃は、西郷隆盛と同じ身長の180cmの巨漢だったと言われる）17歳で、副島種臣の兄で国学者枝吉神陽が主催の楠木正成・正行親子を祭る義祭同盟に加入する。（義祭同盟には、大隅、副島を始め、大木喬任、江藤新平、久米邦武、島義勇等のちに新政府で活躍する主要藩士が所属し、枝吉は佐賀藩の吉田松陰と称されている）大隅は、藩校での朱子学一辺倒の精神教育に反発、弘道館を退学し、蘭学寮へ転じる。24歳で蘭学寮と弘道館を合併させ、その教授に就任、藩主にオランダ憲法を進講する。この頃から、時代の風を読み英学を目指し、長崎の幕府の英学寮へ藩士30人の派遣を進めると共に、藩に経済政策を進言し、かわりしながた代品方として長崎

に赴任する。この代品方は、佐賀藩独特の役職で、幕末時点で佐賀藩は名実日本一の海軍力・技術力（蒸気軍艦、大砲などの製造）を誇ったが、外国から軍艦の購入や製鉄材料輸入に充てる資金として、米に加えて、特産品の有田焼、伊万里焼、白蠟、石炭、和紙、小麦、煙草、木綿、鉄、硫黄、大理石、辰砂などの換金作物を奨励して、国内外に輸出した。幕末には、公称35万石の佐賀藩は、実質90万石の実力だったといわれる。1867年のパリ万博には佐賀藩は佐野常民を代表として参加、幕府の246箱、薩摩の225箱に対し、佐賀藩は526箱を出品している。代品方は、いわば佐賀藩の交易商社的役割で長崎と大阪に貿易館を設けた。大隅はここで経済的センスを養ったと思われる。長崎に行った大隅は、当時、長州戦争の影響で関門の港が閉鎖され、九州の米が蔵屋敷のある大阪に移送できず、米価が暴落しているのに目をつけ、英学寮で知り合った薩摩・長州の志士と話をつけて大阪までの安全な船便を保証させ、長崎在住の佐賀商人に安い米を買い集めさせ大儲けさせてやる。そして、佐賀藩の英学寮“致遠館”を創設しフルベッキを校長に招くが、学校建設資金とフルベッキの給与を全額佐賀商人たちに負担させている。その才覚が、ここで遺憾なく発揮されたといえる。

大隅は31歳のとき、明治新政府に徴士として出仕してから、長寿を全うして85歳で亡くなるまで、まさに“政治こそわが命”の生涯をおくる。日比谷での国葬には120万人の民衆が参列した。早稲田大学の前身・東京専門学校を創設、自由民権運動に乗って、立憲改進黨を結成、61歳で、初の政党内閣である第一次大隅内閣（隅板内閣）を組閣、半年足らずで崩壊するが、77歳で第二次大隅内閣を発足、これは3年続くが、対支21カ条要求で、歴史的には汚点をつける。彼は、本来は演説が嫌いだったとされているが、一旦演説を始めると高揚して、相手を圧倒するまで止まらなかったという。この当時の政治化には珍しいことに、日記も手紙もメモも自筆は何も残していない。何でも、小さい頃に、字のうまい友達がいて、いかに頑張っても追いつけないと見極めると、以降筆を執らぬことに決めたそうだ（その友達とは、能筆で知られる副島種臣だろうか）。大隅は佐賀で、龍造寺八幡の宮司の娘・美登と結婚して、一女・熊子を得ている。大隅が出仕して、東京へ出るとき、この熊子と母三井子を伴ってきたが、美登とは離婚したらしく、東京へ出た翌年には、三枝綾子（小栗上野介忠順の従妹）と再婚している。この綾子には、結局子が授からず、実子は熊子のみで、熊子は養子の南部藩の秀麿迎えて結婚したが子ができず（のちに離婚）、大隅の末孫は、養子同士（松浦家・三枝家出身）の子である。

前妻の美登に大隈は未練があったのか、医者として再婚した美登に宛てて、仕事で近くに行くから「鹿島神宮で会おう」と三回ばかりラブレターを書いているのが、美登の家の襖の下張りの中から後に見つかり、唯一の大隅の直筆といわれるが、今は紛失して残されていないようだ。それにしても、大隅も、木戸、岩倉、大久保等に負けずに、新政府に数々の建議書を書いているが、誰が清書したのかわからない。10歳年上の姉・妙子が離縁して、一緒に住んでいたが、相当な才女・女傑だったという。また、実子・熊子も、男だったら大隅を凌ぐほどの女傑だったといわれ、母三井子ともども女傑家族だったので、女性の手

になるのかなどと想像すると面白い。ただ、大隅は、明治2年には築地に政府より5千坪の邸宅を貰い、そこに絶えず食客が20人ほど転がり込んで、日夜、議論していた。伊藤博文、井上馨、五代友厚、中井弘、前田正名、勝海舟、河野敏鎌、前島密などが屯する築地梁山泊の面々である。それを接待したのが、肉親の女傑たちであった。

梁山泊の後には、福沢諭吉の送り込んだブレーンの、中上川彦次郎、小泉信吉、矢野文雄、尾崎行雄、犬養毅、小野梓、牛場卓郎、牟田口元学、中野武營、島田三郎、田中耕造など多士済々に取り囲まれていたから、代筆には困らなかったろう。大隅は、政治家として、こうしたブレーンを有効に使って、政治に生かしてきた日本で最初の男だろう。

大隅が新政府へ出仕のいきさつ

明治新政府への出仕には、貢士と徴士の二つがある。貢士は各藩主より推薦で、新政府の仕事に従事し、徴士は、政府から選別して取立てた政府役人である。大隅重信は、江戸開城の二日後には、徴士の外国事務局判事として、長崎裁判所勤務となる。一説には、小松帯刀の推挙と言われるが、真偽はわからない。長崎の英学塾致遠館は佐賀藩士のみならず、他藩士にも解放したので塾頭として采配していた大隅と副島種臣の知名度は高かった。長崎裁判所は、外国との窓口で、諸外国との幕府時代の貸し借りを整理し、貨幣のトラブルなどを調整していた。1868年3月に出仕し、一ヵ月後の4月に、浦上キリスト教信徒弾圧問題で、各国の抗議に苦慮していた三条・岩倉らは、大隅を大阪に呼び寄せて、パークスとの論争の対抗馬に起用する。外国使節団との交渉当日、大隅が新政府の地位ある役人でないと見てとった英国公使パークスは威圧的に開口一番「大隅の如き身分の低い役人とは話が出来ぬ」と先制攻撃する。大隅はすかさず「私は天皇陛下よりの委嘱を受けた代表である。その代表が認められないというのなら、あなた方の抗議は撤回されたとみなします。それで、宜しいですね」こう反論されたらパークスは交渉を続けざるを得ない。パークスは次に「宗教の自由を認めず、信徒を弾圧するのは野蛮な国である」と叫ぶ。

大隅は「野蛮との誹謗はいただけない。この信徒問題はわが国の単なる国内問題である。本来他国の干渉を受ける筋合いはない。内政干渉は万国公法に違反するものであるが如何か」更に続ける。「ある歴史家は言う。西洋の歴史は戦乱の歴史であると。又ある宗教家は言う。欧州の歴史は、即ちキリスト教の歴史であると。さすれば、キリスト教の歴史は、即ち戦乱の歴史ではないか。キリスト教は地に平和をもたらすものではなく、剣を送りしものではないか。キリスト教が生まれてこの方、ローマ法王の時代となり、世に風波を起こして、欧州の民を、絶えず塗炭の苦しみにおとしめたと聞く。あなたの言う野蛮な日本でそんなキリスト教を、今すぐ自由にすることは、日本を混乱に落としかねない。」このパークス・大隅論争は、午前10時から午後5時まで続き、その7割は大隅がしゃべっていたといわれる。論客のパークスは、国際法やキリスト教の負の歴史で反論してくる大隅に対抗できず、弾圧問題への外国側の圧力はとりあえず収束する。この論争の結果、三条・

岩倉らの大隅への信任は深まり、パークスも大隅に一目置くようになる。大隅が長崎“致遠館”にて、フルベッキより新約聖書、アメリカ憲法、アメリカ独立宣言、オランダ憲法など学んだ成果と言えよう。丁度この頃、旧幕府が米国に注文してあった甲鉄艦が横浜に回送されてきた。これはアームストロング砲4門を備えた蒸気船で、戊辰戦争中の旧幕軍の手に渡ると不利になると考え、その値25万両と聞いて、早速、大隅は大阪に飛び豪商たちから25万両を調達してきて米国側と交渉するが、内戦時は中立の立場を理由に船を渡さない。(実際は、この船の対価は幕府が前渡し済みであったが、新政府はそんなことは知らなかった) そんな時、彰義隊討伐の命を受けた大村益次郎が、資金がなく銃器が手に入らないのを聞いて、大隅は臨機応変に25万両を転用してアームストロング大砲2門とスナイドル銃数百丁を買わせた。そのお陰で、上野の彰義隊は一日で壊滅することになる。更には、幕府がフランスに依頼して建設した横須賀製鉄所(造船所)の残金精算のために、大隅は、論敵だったかの英国公使パークスに保証人になってもらい、オリエンタル銀行から50万ドルを借りて、仏と交渉して45万両で手を打ち、返済するという離れ業をやったのける。パークスは公人としては保証人になれないので、私人として大隅を信用して便宜を与えたのである。この頃の、外国との懸案は、キリスト教問題が片付くと、各藩と幕府が残した悪貨・贋貨問題の処理であった。これにも大隅が乗り出して対処し、その年の12月には、外国官副知事(事務次官だが、知事は名目の公家や藩主なので実質の、外務大臣)に登りつめる。そして、翌年明治2年2月に、綾子と結婚すると、先述のとおり築地に邸宅を貰い、母、娘、姉を呼び寄せ、築地梁山泊での論客を集めて、国政を議論する。7月には、大蔵大輔兼民部大輔と政府の最重要役職を独占することになる(大輔の上役は“卿”があるが、これも大蔵卿も民部卿も松平慶永と伊達宗城が務める名目上の存在で、実務上最上位)。更に、翌年9月には、副島種臣に代わり、参議になる。まさに、とんとん拍子、一気呵成の昇進である。大隅はそれほど政府役人としての自信があったのかというと、どうやらそうでもないらしい。

渋沢栄一が、洋行から帰国し静岡で慶喜のために働いていた時、政府から徴士として任官の要請があり、断るために東京に向かう。そこで会ったのが大隅で、渋沢は大隅に逆に、次のように説得される。「現在の政府当局は、すべてを新しく建直しているのである。すべての旧套を脱して、悉く新しく生み出さねばならぬ時代であるから1人でも多くの人材を必要とするのである。君は大蔵省の仕事に対してはなんら経験もないというが、その点については、この大隅にしても全然無経験であり、伊藤小輔(博文)とても同様である。今日の状況を例えて言えば、わが国の神代時代に八百万の神々が集うてご相談をせられ、もろもろの施設をされたと同様な訳で、衆知を集めて新しい政治を行おうとする場合なのである。君は幸いフランスにも洋行したし、ヨーロッパの各地の状態も視察しており、財政上の知識にも長じているから、この際是非新政府に入って、創成時代の建直しに尽力してもらわねばならぬ」

このほかにも大隅は、人生の転機をのちに振り返って、案外に正直な告白をしている。

佐賀藩校・弘道館を退学して、蘭学寮に転じたとき、「見通しがあってやったのではなく。時代の空気に促されて、感情のままに動いたが、結果、一生の転機になった」

明治元年の外国官判事として、外交問題の難問に当たった時も「実は安政条約の研究もしたことがなく、志を得て、国の難局に当たるは快なるも、一つ間違えると、一国の禍根につながる外交だけに冷や冷やものであった」意外に、自信というより、綱渡りである。

恐らく、他の新政府の元勳たちも、当初は同じような心境ではなかったか。

遅れてきた佐賀藩が、新政府要職に食い込めたのはなぜか

切腹覚悟で、脱藩した江藤新平は、京都の公家の大御所・姉小路公知の家にもぐり込み信頼されて、良質の情報を得て幕府・朝廷の現状分析した『京都見聞』を書き上げ、藩主閑叟に見てもらえるように工作する。閑叟は、これを読んで江藤を評価し、江藤は謹慎蟄居に留まり、その後は閑叟の隠密的行動をとる。蟄居途中で、長州流れの三条実美にアプローチして面識を得、鳥羽・伏見の戦いの頃には、再び脱藩し、三条・岩倉・木戸などに接近、大政奉還後、自らは東上軍の軍監となって、江戸城開城に立会い、閑叟を上京させて、戊辰戦争に佐賀軍を参画させる。その前に、大隅と副島も脱藩して慶喜に大政奉還を直訴しようとするが果たせず。更に、大隅はイギリス船に乗って横浜、大阪の情勢を探っては、閑叟の出陣を再三促すが閑叟は動かなかつた。最後まで態度を示さない閑叟は、鶴大名、日和見大名、佐賀の妖怪などと呼ばれることになる。だが、閑叟には、あからさまに倒幕に組せない事情があった。閑叟は隠居してからの雅号で、本名は斉正、将軍家斉の娘・盛姫を正妻にして“家斉”の“斉”を貰った。幕府の国防を担って、長崎の御番所で外国船の警固を、福岡藩と一年毎交互に任せられ、幕末には幕府が外国から輸入した軍艦を預かって佐賀藩士の乗組員を配乗していた。

老中阿部正弘の信任厚く、品川のお台場の大砲200門を受注して、順次納品した。

佐幕派で先に亡くなった薩摩の島津斉彬は、閑叟とは母が鳥取藩池田家の姉妹同士の従兄であり、同じく佐幕の宇和島藩主伊達宗城は閑叟の姉猶姫の夫であり、福井藩松平春嶽は、閑叟の正妻・盛姫（家斉の娘）が亡くなって再婚した妻・筆姫の実兄であった。華麗な閨閥である。

幕府に恩義があった閑叟が、動いたのは将軍慶喜の大政奉還を確認してからである。“斉正”を返上して、直正に改め、息子の藩主・直大を東征軍に参加させた。遅れて倒幕に参画しても最後には、朝廷軍が佐賀藩の持つ、海軍力（軍艦・海軍）とアームストロング大砲などを必要とすること、日本一の工業力・技術力が評価されることを読み切っていたのである。そのことは、明治2年の最初の官職公選で、3人の議定に選ばれたのは、岩倉具視と徳大寺実則と鍋島直正であり、前年、戊辰戦争が終わると直ぐに、岩倉具視は息子の四人、具定、具経、具綱、具知を閑叟に預けて教育させている。岩倉は閑叟に絶大の信頼を寄せ、閑叟との連合内閣を構想したとも言われるが、晩年病弱であった閑叟が、明治4

年1月に亡くなったので果たせなかった。

佐賀藩10賢人にみる佐賀藩の人材

まず藩主・鍋島閑叟（1812－1871）から見てみよう。

閑叟は佐賀藩江戸屋敷で育ち、盛姫と結婚し17歳の時、初めてお国入りをする。行列が藩邸を出たがなかなか前に進まない、部下に理由を聞くと、借金取りが立ちふさがって行列が進まないとの返事で、先代藩主の浪費で藩の財政事情がとんでもない状態にあることを初めて知る。お国入りすると、早速閑叟は昌平坂学問所の教授でもあった師の古賀穀堂に改革案を出させ、率先して質素儉約を心がけ、同時に藩の旧弊を排し、財政改革、産業開発、軍事強化、藩校弘道館拡充、長崎御番所警備の強化を目指し、自らは長崎に再三出向いては、オランダ船に乗り込んで西洋の新知識吸収に努める（当時外国船に乗り込んだ唯一の大名）。精練方を設けて、反射炉を建設して、製鉄大砲を日本で始めて作る。そして、長崎伊王島・神之島に築堡、天草巨艦建造の軍港を設け、三重津海軍所で軍艦を輸入して乗組みを教育、国産初の木造蒸気外輪船“涼風丸”を建造、幕府の軍艦“観光丸”も含めて、13隻の軍艦を擁していた。幕府が長崎海軍伝習所を開いた2年間で130人を育てたが、内佐賀藩は48人で幕臣より多く、幕府が閉鎖した後も佐賀藩は訓練を受け続けた。

閑叟は、時代を先取りしずば抜けた先進性を持った名君で、技術立国日本の基を作り上げた男である。

精練方と三重津海軍所を総裁したのが、佐野常民（1822－1874）である。佐野は江戸・京都と大阪の適塾で学び、江戸では象先堂塾塾頭・伊東玄朴（シーボルトと共に日本に種痘を広め、閑叟の息子直大と娘貢姫が日本最初の種痘を受ける）に師事、佐賀に呼び戻される時、田中久重（からくり儀右衛門）などをスカウトして、精練方を創設、海軍を養成する一方、蒸気車の模型、蒸気船、電信機や理化学製品を開発した。のちにその経験でパリ万博（1867年）の佐賀藩代表として渡欧、明治のウイーン万博の大使を務め、大蔵卿を経て、日本赤十字社創設に関わる。

島義勇（1822－1874）は戊辰戦争で東北を転戦するが、幕末より、閑叟の命で北海道・樺太を探検、蝦夷（北海道）開発者として知られる。明治になり秋田県令を務めるが、佐賀の乱で刑死する。枝吉神陽（1822－1862）は、国学者で副島種臣の兄。肥前の吉田松陰と言われ、義祭同盟を主宰して、佐賀藩士の尊皇思想の精神的シンボル。

弟の副島種臣（1828－1905）は、幕末には大隈重信と共に行動し、致遠館を経営、閑叟の信頼も厚く、新政府で佐賀藩出身の最初の参与・参議となり政体書起草、外務卿として国際的に正義の人と評判となる。征韓論で下野、民権運動には参画せず、明治天皇の侍講、枢密顧問官、内相など歴任。自由な精神と能筆家として知られる。島義勇は従兄弟。大木喬任（1832－1899）は、江藤と共に東京遷都を建議、東京都知事、初代文部卿、参議、司法卿、民法編纂総裁、元老院議長、枢密院議長、文部大臣など歴任。

明治6年、14年の政変を生き残り、佐賀藩出身者で一番穏健に政治生命を貫いた。

江藤新平（1834－1874）脱藩して尊攘運動に係わり、佐賀藩が明治新政府へ関与の口火を切った。明治新政府の司法卿、文部大輔、左院副議長を歴任し、司法制度、警察制度の確立に奔走する。征韓論に敗れて下野する。大木らと民撰議院建白するが佐賀の乱に巻き込まれ敗死する。佐賀の乱は、江藤の知名度を利用されたが、本意ではなかったと思う。大久保がその才能を妬んだで、執拗に追い詰めたとも言われるが、それほど大久保は小者ではない。西南戦争と同様、士族の反乱が明治維新を無にすることを恐れたのだろう。帰郷するなという大木の忠告を聞かなかった江藤の迂闊さが招いた悲劇だと思う。

相良知安（1836－1906）政治には直接関連しないが、相良は佐倉順天堂塾で学び、ドイツ医学導入に尽力、医制76か条の原稿を書き、医学でも佐賀藩は貢献した。

大隅重信についてはすでに多くを語った。**久米邦武**（1839－1931）は、大隅の一つ違い下で、長生きした大隅より更に長寿を全うした。2人は子供の頃から仲良しで、2人の遊びにいつもついて回った女の子が、後に久米の妻となる。久米は実記編纂の後、歴史学者となるが、回覧中の久米のものの見方の的確さと精密さはどこから来たのだろうか。久米が蘭癖大名・閑叟の侍従として、閑叟が質問するあらゆる疑問に応える役割の中で、その才能が磨かれたことはよく知られている。閑叟は「唐鑑会」と称する、藩主と家臣で隔てなく議論しあう場を設けた。その中で、佐賀藩士たちは、自分の意見を言い合うことで鍛えられた。『葉隠』（山本常朝著）は、佐賀藩の武士道の規範として、“武士道とは死ぬことと見つけたり”の語句が有名だが、これは、藩主のためなら死も辞さないとの主旨だが、決して、盲目的に藩主命に屈せよとは言っていない。むしろ、個の確立を基礎に求めて、藩命に反逆しても、藩の為になることに命を懸けよと論している。「御家（藩）をひとりにて担い申すころざしにて、何事も務めよ」というのである。新政府に出仕した佐賀藩士出身者は、“藩”を“国”に読み替えて、すべてに全力を尽くしている。お互いに親友でもある元藩士の政治的浮沈に遭遇しても、決して情に流されることなく、旧藩で群れることもなく、常にわが道を歩んでいるのは、見事としか言いようがない。そして、お互いに多能である。自分の専門や限界を作らない。いわゆるジェネラリストで、リアリストである。それを久米の父親・久米邦郷の職歴で見ると、邦郷は藩の山方として、鉦山・石炭管理などを勤める一方で、目安方で藩の会計を、長崎聞役（藩の長崎出張所）で、大砲、軍艦の購入、藩特産品の輸出などの貿易に携わり、有田皿山代官として、有田焼の生産・輸出取締りの専売に関与、江戸、京都、大阪、堺、兵庫、長崎の藩支所を監督、大阪蔵屋敷詰で米の販売管理、そして御側頭として藩主の側近としても仕えている。佐賀藩では誰もが万能を要求されてきたのである。久米もそういう環境下で育ってきた。それが新政府にあって、佐賀藩士が何でもこなせた秘密であったといえる。大隈もそうであった。

明治14年の政変とは何だったのか

岩倉使節団が帰国した明治6年の政変で、西郷隆盛、板垣退助、後藤象二郎と共に、江藤新平と副島種臣がまず下野した。その時、大隅重信と大木高任は政府に残留する。大隅は大久保利通には大久保の死ぬまで信頼されて僚友の如くに重用され、佐賀の乱、台湾出兵、そして西南戦争での軍船の調達、その財政的バックアップを成し遂げている。大久保が紀尾井坂の変で暗殺されたあとは、当然の如く筆頭参議を務めて、明治14年の政変に至る。

それでは、大隅が下野することになる明治14年の政変とは、いかなる事情があったかを見てみよう。

ごく単純に事実だけを述べると、「明治15年には議員選挙を実施した上で、明治16年には国会を開設し、別途、勅裁憲法制定をすべし」との大隅が天皇に提出した意見書が、過激で政府転覆の含みがあるとして、明治14年、大隅が東北行幸の天皇の随行で東京に帰ってきたその日に、大隅と大木の不在の閣議で大隅の罷免を決定して、一方的に大隅に伝達された。これを以って大隅とそのブレーン（河野敏謙、前島密、矢野文雄、小野梓、犬養毅、尾崎行雄ら）が連座して下野した政変である。

この政変には3つの背景がある。一つは、当時自由民権運動の高まりで、憲法制定や国会開設への要求が、福沢諭吉や板垣退助の煽動もあって、新聞・雑誌の論壇で高まり、天皇は有栖川宮左大臣に参議たちの意見書取り纏めを要請していた。参議の中で、最後に出した大隅の意見書が、プロシヤ的立憲君主制憲法を考えていた岩倉具視や伊藤博文とやや趣が違ふと見做され、且つあまりに急進的であるとして、反大隅派を刺激したこと。

二つ目は、偶々その頃、黒田清隆が北海道官物払下げ問題で、1400万円の原価のものを、僚友・五代友厚の会社の“北海社”に38万円、30年賦・無利子で払下げを決定したことに大隅が反対したのを、政府転覆の大隅の一連の陰謀と捉えられたのである。

更には、明治初年からの由利財政を批判して登場した大隈は、大久保のサポートもあって積極財政政策で、廃藩置県、地租改正、秩禄処分、殖産興業、西南戦争などの戦費調達を凌いできた大隅財政も度重なる紙幣増刷でインフレを防止できず、折りしも登場してきた松方正義の主張する正貨主義・緊縮財政に抗えなくなりつつあった。大隅財政にも退潮が見え始めたのである。事実、大隅の後を受けた松方財政は、明治財政の中興を担い、明治中頃の日清・日露戦争をも支え、健全財政を維持したのである。

下野に際して大隈は、「予は俯迎して天地に愧ずることなし。いよいよこれより心を定め、静居して以って天下をトせんと欲す」とさばさばした感慨を述べている。

下野後も、周囲は大隈を放っておかなかった。明治15年4月、立憲改進黨総裁に推されて、野にあって漸進的、英国的立憲政党を目指した。一方で東京専門学校（現早稲田大学）を創設し、人材育成に努めた。だが政府側は、虎を野に放ったと監視を怠らず、あらゆる妨害活動を行った。学校は謀反人の養成所だとして、教師や生徒の募集を妨害し、経営資金投資に横槍をいれ、学園にはスパイまで送り込んだといわれる。大隈の影響力を恐

れたのだろう。そのため、大隈は開校式にも出席せず、長い間部外者を装い、初めて学校に顔を出したのは20年後の記念式典だったという。

明治14年の政変は、明治6年の政変以来、徐々に土佐、肥前が排除され、結果、薩長閥の跋扈を許した。しかし、北海道官物払下げは中止され、伊藤らは、国会開設と、憲法発布の時期を明文化することを余儀なくされ、大隈はその政治的存在を歴史に残すことになった。国会議事堂に伊藤博文、板垣退助と共に銅像を建てられたゆえんである。

明治維新を用意したのは、江戸の教育力である

「大隈重信と佐賀藩」を考えるうちに唐突ではあるが、江戸時代の文明力があってこそその明治維新であったことに思いが至った。明治の日清・日露戦争まで活躍した元勳たちは、当然のことながら、皆江戸の生まれである。倒幕の起爆力になって、幕末までに散っていった志士たちも、明治まで生き延びて、新政府に参画した元勳たちも、誰もが江戸の教育と文化の恩恵を受けて、育った時代の寵児である。「はじめに」で述べたように、シュリーマンが言う「蒸気機関なしに到達しうる最高の文化と技術力」を持っていた江戸時代。

久米邦武が、英国で、生々しい産業革命の現場を見て、彼我の差は「僅かに40年足らず」と、産業革命摂取の40年の差と時間軸で文明の差を捉えた時、久米も回覧中の首脳達も、日本の文明力と基礎力に自信があったからに違いない。久米は実記の中で、必ずしも江戸の文明を賞賛してはいないものの、40年という時間軸の捉え方の自信の裏付けには、自らが属していた佐賀藩が達成していた技術力への信頼があったことが透けて見える。

斉藤孝氏は、江戸時代の教育で、寺子屋や藩校・昌平坂学問所での素読体験が、身体中で論語や四書五経や物語を感じ取り、大局観を養うのに役立ったという。

福沢諭吉など明治の啓蒙主義者が、脱亜入欧を急ぐ余りに、「門閥は親の敵でござる」などと江戸文化を貶めることで、図らずも「江戸暗黒史観」(芳賀徹氏)を定着してしまった。

こうして長い間、江戸の豊かな文明力が蔑ろにされてきたが、歴史をよく振り返ってみると、日本の近代はすでに江戸の中期より始まっていたことに気付く。

教育面では、天保・慶応年間には、全国に8500の寺子屋があり、農民の子や娘たちも争うように寺子屋へ通って学んでおり、識字率は7-8割だったとも言われる。

それを支える出版文化は、江戸の初期には徳川家康が活版印刷を始めたが、漢字・仮名は活版印刷に向かないとわかり、やがて木版印刷に代わる。貸本屋は江戸に650店、大阪で300店が店を張り、江戸ではあらゆるジャンルの本があり、見つけれない本はないとまで言われた。商人、農民、百姓のハウツウ物や教養ものから、論語、浮世草子、洒落本、滑稽本、人情本、源氏物語、万葉集、名所百景、道中物。ねずみ・鈴虫の飼い方、犬・猫辞典などおたく物、ペット物など何でもござれの出版文化。伊勢詣、富士講、善光寺参りなど庶民の女性まで旅行に出かけた。紀行文や日記も数多く出版された。旅行ブームで発達したものには、飛脚便、為替手形や諸国ガイドブックもある。御師は、今で言う

観光業者であった。道中関所手形、宿手配、お土産手配は御師の役目である

鎖国はしていたが、吉宗の時代から、蘭学が解禁となり、天文学、地理学、医学、博物学、暦学の本ももてはやされた。

文化面では、歌舞伎、文楽、俳句、浮世絵、茶道など江戸時代に最盛期を迎えた。

経済面でも、江戸時代初期は、新田開発ブームで各藩とも米の生産を増やす為に、河川の整備、灌漑施設、荒地や海の干拓で畑への耕作地造成などに努めた為、人口は元禄時代には江戸初期の3倍近い3000万人に達した。参勤交代のための5街道の整備、築城による競い合い、金銀鉱山の開発、築堤、溜池、用水路など土木事業も、世界に引けを取らなかった。都市化も進み、城下町、門前町、港町の成立。京都、大阪、江戸は百万都市に発達した。

各藩とも、米以外の換金作物や特産品開発にも競って力を入れた。桑（蚕一絹）、楮（和紙）、漆（漆器）、茶の四木、紅花、藍、麻、木綿の四草を始め、手工業では、友禅染、西陣織、大島紬、久留米紬など織物、塩、油、草履、煙草、楊枝、歯ブラシ、紅、おしろい、酒、味噌、酢、醤油、九谷焼、有田焼など陶磁器、会津盆など塗物など、今の各地の特産品につながる源流は江戸に始まるものが圧倒的に多い。

正月、盆、雛祭、節句など四季折々の年中行事や、各地のお祭もほとんどは江戸時代に確立したといっても過言ではない。

和算ブーム、和時計、刀、カラクリ人形などは江戸時代の技術力の一端を示している。徳川幕府は室町・戦国時代から各地に残る古文書のアーカイブ化にも努めた。吉宗は青木昆陽に全国を回らせて、古文書の発掘に努め、残す価値の高い文書は借り受けてきて写本を作り、原本は各地に戻して保管を勧めた。檀家制度による戸籍把握と共に、江戸時代ほど文書が重要視された社会は、世界でも類を見ない。百姓からの藩主や幕府への上訴も文書でなされた。だから百姓でも字が読め、書けることが必要な社会であった。

幕末の志士たちや明治新政府の元老たちが、あらゆる政策建議を文書で以って上申し、日記や手紙を多く残しているのは、こうした江戸の文化の自然の継承であると考えられる。商人も同じだ。丁稚から奉公して番頭に登りつめるまでには、字が読めないと出世できない。町人誰もが寺子屋に通って競って勉強した。

換金作物が、国内に流通する為には、廻船や道中運搬の流通システムが必須だ。米の流通には、大阪の蔵屋敷に全国から収められ、蔵に入ると米切符が発行される。この米切符は、蔵出しに使うが、売ることも出来る。米市場で米価が上下すると、米手形・米為替として、売買もされた。このため先物市場も世界に先駆けて発達していた。

こうして見てくると、日本の近代は江戸の中期にはすでに始まっていたという私の確信となった。そして、その江戸に始まった近代が、明治維新を実現したのである。

大隈重信と佐賀藩の研究で、その人材育成が如何になされたかを見ていくうちに、計らずも、その源泉が江戸時代の文明力、とりわけ教育力にあることに行き当たったところで、この一文を終わることにする。以上